

3) ニゴロブナ漁獲物調査結果

三枝仁・遠藤誠・太田滋規・金辻宏明

【目的】ニゴロブナの資源管理型漁業を進めるにあたり、本種の漁獲対象資源の動向を把握し、資源と漁獲の関係を明らかにすることが必要である。そこで、ニゴロブナが主に漁獲されている小糸網（刺網）漁業での漁獲物から標本を抽出し、漁獲体型・年齢等について調査した。

【方法】調査期間は平成13年1月から3月（4月以降も調査を継続中）に設定した。調査は標本そのものを持ち帰って調査する方法と、魚揚場で標本を調査する方法によりおこなった。標本は沿湖漁協の小糸網漁業者2名に依頼して収集した。持ち帰り調査標本の一部は冷凍保存されていたため、後日解凍した後に体型の測定、耳石標識の確認および生殖腺重量の測定をおこない、生殖腺重量比（GSI）を算出した。魚揚場での調査は体型の測定、耳石の摘出のみをおこない、耳石は持ち帰って標識確認した。

【結果】平成13年1月および2月において、7回に分けて収集した標本は269尾であった。これら収集した標本において雌雄判別したものの内、雌は148個体で平均体長が 184.44 ± 16.67 mm、平均体重は 196.51 ± 67.82 gであった。一方雄は60個体で平均体長が 176.62 ± 13.00 mm、平均体重は 167.11 ± 39.70 gであった。また、標本の生殖腺重量比（GSI）をヒストグラムに示したところ、雌では2から16の範囲に広がりモードが12で、雄では4から12の範囲であり6にモードが現れた（図1）。次に標本の標識を確認した結果、平成11年度に放流した標識魚が74個体、平成9年ないしは10年に放流したものは4個体であった（表1）。この放流魚と無標識魚の体長組成を作成し比較してみたところ、無標識魚のモードと平成11年度放流群のモードは180mmで共通しており、1⁺年魚であっても小糸網で漁獲される体型に十分成長できるものと思われた（図2）。さらに、2⁺年魚以上にあたる平成10年度放流群ないし9年度放流群は、体長210mmから240mm程度とかなり大型に成長しており再捕数も少なかったことから、現在冬季に小糸網により漁獲されるニゴロブナは主に1⁺年魚が占めているものと考えられた。

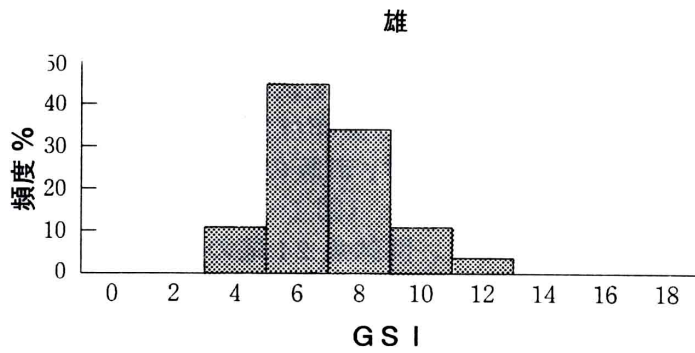
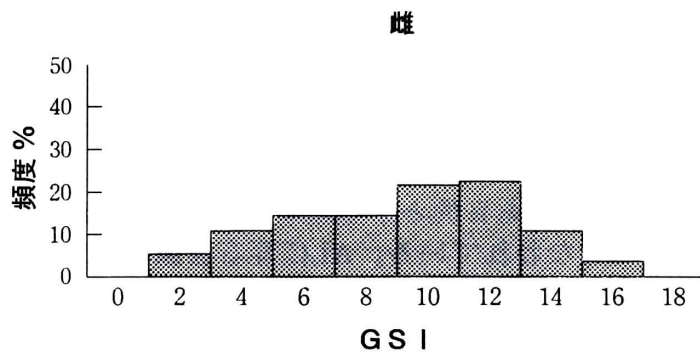


図1 小糸網標本におけるニゴロブナ GSI 組成

表1 放流群別採捕数

放流群の種類	採捕数
1997 放流群	3
1998 放流群	1
1999 放流群	74
無標識	187
不明その他	4
合計	269

